

弥生時代のブタについて

西 本 豊 弘

-
- | | |
|-----------------|--------------|
| はじめに | 4. ブタの用途 |
| 1. 弥生時代のブタの出土例 | 5. ブタからみた弥生人 |
| 2. 弥生ブタの形質 | おわりに |
| 3. 弥生ブタの形質以外の特徴 | |
-

論文要旨

弥生時代の遺跡から出土する「イノシシ」について、家畜化されたブタかどうか、再検討を行った。その結果、「イノシシ」が多く出土している九州から関東までの8遺跡では、すべての遺跡でブタがかなり多く含まれていることが明らかとなった。それらのブタは、イノシシに比べて後頭部が丸く吻部が広がっていることが特徴である。また、大小3タイプ以上は区別できるので、複数の品種があると思われる。その形質の特徴から、筆者は弥生時代のブタは日本でイノシシを家畜化したものではなく、中国大陆からの渡来人によって日本にもたらされたものと考えている。また、ブタの頭部の骨は、頭頂部から縦に割られているものが多いが、これは縄文時代には見られなかった解体方法である。さらに、下顎骨の一部に穴があげられたものが多く出土しており、そこに棒を通して儀礼的に取り扱われた例も知られている。縄文時代のイノシシの下顎骨には、穴があげられたものはまったくなく、この取り扱い方は弥生時代に特有のものである。このことから、弥生時代のブタは、食用とされただけではなく農耕儀礼にも用いられたと思われる。すなわち、稲作とその道具のみが伝わって弥生時代が始まったのではなく、ブタなどの農耕家畜を伴う文化の全生活体系が渡来人と共に日本に伝わり、弥生時代が始まったと考えられるのである。

はじめに

弥生時代に家畜化されたブタがいたと筆者が発表してから2年余りになる。その後、いくつかの弥生時代の遺跡出土の動物遺体を見せていただき、ブタが含まれていないかどうか調べてみた。その結果、これまでイノシシが多いと言われていた遺跡では、ブタが含まれていることが明らかとなった。イノシシかブタかの再検討の過程で、協力していただいた各地の研究者から、イノシシとブタはどこが違うのかという質問を頻繁に受けた。その時には、イノシシやブタの実物やレプリカを比較することによって説明してきたが、その違いを多くの方々に分かりやすく説明する必要性を強く感じた。その点については、以前に『季刊考古学』第28号で少し述べたことがあり、また、いろいろな機会に話してきた⁽¹⁾。ここでは、写真を含めて『季刊考古学』の内容と重複するところも多いが、その後の所見を加えて、筆者がこれまでに弥生時代のブタの特徴と考えた形質について説明したいと思う。

しかしながら、この研究は始めたばかりであり、弥生時代のブタ（以下、弥生ブタと記す場合がある）の資料をすべて見たわけではない。また、実見した資料であっても発掘報告書が未刊行のため、ブタについて公表出来ない場合が多い。報告書が刊行されていても、すべての資料を見ることが出来なかったものもある。また、形質に関する議論は、計測値を用いて行うべきであるが、破片となっている資料が多いために、現在のところ公表できるデータが少ないと言わざるを得ない。このような不十分な状態ではあるが、それにもかかわらず、ここでブタについて述べようと思ったのは、観察所見によって得られるブタの特徴がかなりよく分かってきたためである。もちろん、今後、保存状態の良い新たな資料が得られれば、さらに新しい事実が明らかになるであろうし、これまでの所見を変更する必要も出てくるであろう。なお、計測値等の数量化したデータによる検討は、現在進めているところである。いくつかの発掘報告書が刊行された後、それらのデータを用いてブタの形質について改めて論じる予定である。

ところで、骨についての観察所見を紹介する前に、少し述べておきたいことがある。それは、骨の形質について検討を加える場合の原則として、同一の年齢・同一の性の資料を比べるということである。また、個体差があることを十分に考慮する必要がある。その上で、時代による変化や地域差も考慮しなければならないのである。これらの点を考えるためには、多くの比較資料が必要であり、また、多くの資料を観察した経験も必要である。

本論は、考古学を専攻し、骨格についてのある程度の知識がある読者を対象としてまとめたものである。そのために、出来るだけ分かりやすくまとめたつもりであるが、実際に骨をまったく扱ったことのない考古学者が本論によって、イノシシとブタを分類出来るようにするための手引きではないことをお断わりしておきたい。

1. 弥生時代のブタの出土例

これまでに、筆者が資料を実際に検討して、ブタが含まれていることがほぼ確実と思われる遺跡は、大分市下郡桑苗遺跡・佐賀県唐津市菜畑遺跡・佐賀県吉野ヶ里遺跡・大阪府和泉市池上遺跡・大阪府八尾市亀井遺跡・奈良県田原本町唐古遺跡・愛知県朝日遺跡・神奈川県逗子市池子遺跡である。また、展示された資料では、福岡県糸島郡二丈町曲り田遺跡の資料も含まれる。それぞれの遺跡のブタの内容について簡単に述べておく。

(1) 下郡桑苗遺跡

最初に弥生時代のブタの存在を確認した遺跡である。すでに報告書が刊行されているので、⁽²⁾詳細はその報告書を参照していただきたい。報告書を手に入れていない方もおられると思うので、その内容を簡単に紹介しておきたい。1988年度の発掘調査で、保存状態の良いブタの頭蓋骨が3点出土した。そのうち、No.2の頭蓋骨は、生後約1歳半の若い雄の個体であったが、野生のイノシシと比べると頬骨が外に張り出しており、後頭部の平面形が丸みを帯びていた。

(写真図版2参照) また、この頭蓋骨の側面観を見ると、野生のイノシシに比べて後頭部が高いことも特徴であった。この二つの特徴だけから見ても、この資料は野生のイノシシに比べて頭蓋骨が短く丸くなっていることを示していた。これは、家畜化されたブタであることを明瞭に示す特徴である。その他、この資料では第1・2後臼歯が丸みを持つことなどの家畜化の特徴を多く示していた。

No.1の資料は、雌の成獣であり左側第1後臼歯内側前部の歯根部の骨が融けており、歯槽膿漏(歯周症)の病変と認められた。後頭部の高さが野生のイノシシよりも高く、骨が肥大している他には、ブタとしての明瞭な形質的特徴はあまり見られなかった。No.3の頭蓋骨は、生後約1歳の雌の若獣で、これも左側第1後臼歯内側前部の歯根部に歯槽膿漏の病変を示していた。若い個体にもかかわらず、歯槽膿漏になっていることに奇妙な感じを持ったことを覚えている。この資料は1歳と若いので、形質についての検討は厳密には出来ないが、同一の年齢のイノシシと比べると頭蓋骨が大きく、丸みを帯びていることが特徴である。

さて、この遺跡では1990年度にも大分県埋蔵文化センターにより発掘が行われて、筆者も調査に参加させていただいたが、新たにブタの資料が多く出土した。大分市も大分県の発掘地点の近くを発掘しており、その調査でもブタの骨が出土していることを筆者は現地を確認している。大分県の調査によって出土した資料は、筆者のところに分類のために送られてきたが、その中に非常に保存状態の良い雄の成獣の頭蓋骨が含まれていたため、大分県教育委員会の好意により、未報告の資料ではあるが紹介させていただくこととした。この資料の特徴は、写真図版1に示したように、側面観を見ると後頭部がイノシシよりも高いことである。野生のイノシ

シの場合、成熟した雄の頭蓋骨は上面が平坦で、側面観で見ると眼窩の部分が少し膨らみを持っている。縄文時代の遺跡の出土資料で見ると、加齢変化によりその膨らみが少し増すことがある。しかし、この資料のように後頭部が高くなる特徴は、野生のイノシシにはない。この資料はこれまでよく分からなかった雄のブタの形質を明らかに示していると思われる。なお、この頭蓋骨は成獣ではあるが歯の摩耗はあまりなく、老獣ではない。それにもかかわらず、左右の第1・2・3前臼歯の歯根部分に歯槽膿漏の病変が見られ、それらの歯の歯根がかなり露出して、歯が抜ける寸前であることを示している。この他、家畜化を示す形質的特徴が多いが、詳細は報告書で述べることとする。

(2) 菜畑遺跡

この遺跡の資料は、すでに報告されており、その巻頭のカラー写真図版がよく知られている⁽³⁾。「イノシシ」の下顎骨3個がまとまって出土したもので、下顎枝の部分に穴があけられて、そこに木の棒が通されて吊されていたものである。発掘担当者の中島氏によれば、これらの「イノシシ」の出土した地点のまわりには、朱塗りの土器等が出土しており、何かの儀礼の場所であったと推測されるという。このような出土状況から、この「イノシシ」は弥生時代の狩猟儀礼を示すものと言われた。筆者は、この遺跡の報告書が刊行されたときから、この「イノシシ」の事例に注目しており、「弥生時代の狩猟儀礼」説に疑問を持っていた。そこで、この資料を実際に見るために以前に唐津に行ったことがあった。しかしながら、「イノシシ」の出土時点での保存状況が悪く、取り上げに失敗したとのことであり、骨を見ることができなかった。

さて、1989年になり大分市下郡桑苗遺跡で弥生時代にブタが飼われていたことが分かったので、菜畑遺跡の資料を改めて見る必要を感じた。そこで、唐津市で資料を見せていただいたところ、すでに述べた3例の資料以外のものの中にブタと思われるものが含まれていることが判明した。このことは、すでに『季刊考古学』第28号に紹介したことがある⁽¹⁾。たとえば、写真図版3-3に示した資料は成獣上顎骨の破片であるが、第2後臼歯がイノシシよりも丸いことが特徴である。しかも、縄文晩期の本州のイノシシよりも大きい。第3後臼歯も丸みを帯びていた。この資料は、当時の日本の野生イノシシよりもはるかに大きいブタであり、大陸から持ち込まれたものと筆者は考えている。この資料の他に、下顎連合部の長さが短く歯列の乱れたもの等、ブタではないかと思われるものがある。また、報告書の作成時に鑑定に出されなかった下顎骨で、第1・2後臼歯部分に明瞭な歯槽膿漏を示すものがあった(写真図版3-1)。このような例は、家畜のブタでなければ、見られない病変である。四肢骨では、イノシシとブタの区別は出来なかった。しかし、第1頸椎では、イノシシに比べて上面の隆起が弱く幅が広いものがあり、おそらくブタの特徴と思われる形質であろう。なお、この遺跡の資料の中には、野生のイノシシと思われるものも含まれており、イノシシとブタが混じっていると思われる。このように、菜畑遺跡ではブタが含まれていることが明らかであり、しかも「山の寺式」の時期

から出土していることから、弥生時代の始まりの段階からブタが日本に持ち込まれていたと思われる。そして、最初に述べた棒に吊された3個の下顎骨がブタであったとしたら、狩猟儀礼とは言えないであろう。むしろ、後に述べるように唐古遺跡の例などからみて、それらは農耕儀礼を示していると思われる。

(3) 吉野ヶ里遺跡

この遺跡の資料は、発掘当時に調べた2個体分の若獣と下顎骨とその後に出土した頭蓋骨破片等である。その内容の一部はすでに報告している⁽¹⁾。最初に見た下顎骨は、いずれも第3後臼歯が未萌出のもので、第2後臼歯が大きいことが特徴である。大きさをもたらし要因は、第2後臼歯の後部に日本の野生イノシシには筆者が見たことのない縁が見られるためである。この特徴は、他の弥生時代の遺跡の資料では類例を知らないので個体変異かもしれないが、ブタが大陸から持ち込まれたことを示す要素の一つではないかと考えている。その後の発掘で得られた資料は33点であり、その中に下顎骨は3点含まれていた⁽⁴⁾。下顎連合部を伴うものがあり、他の遺跡で見られたと同様の下顎連合部が短い特徴が見られた。この遺跡の資料は、出土量が少なくてよく分からないが、菜畑遺跡と同様に大型のブタが飼われていたと思われ、さらにもう1種、下郡桑苗遺跡のものに近い中型のブタがいたようである。

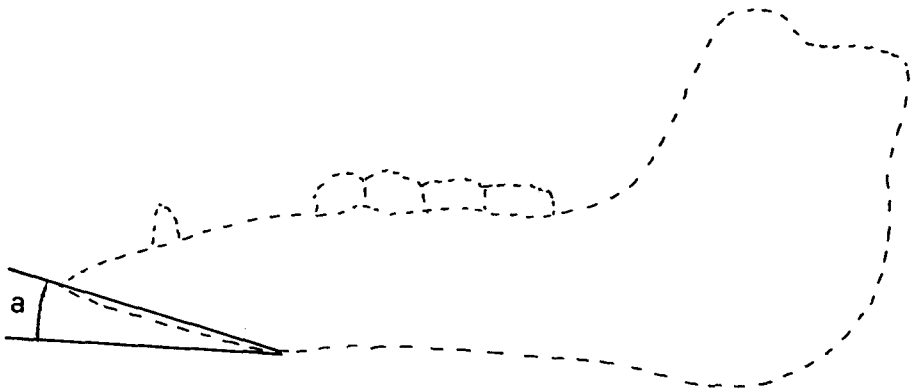


図1 イノシシの下顎骨の側面
aは、下顎連合部と下顎底の成す角度を示す。

(4) 池上遺跡

「イノシシ」が多量に出土したことで知られており、金子浩昌・牛沢百合子両氏により調査され、野生のイノシシを飼育していたのではと報告されている⁽⁵⁾。筆者は、学生時代に金子浩昌先生に連れられて、発掘中の池上遺跡を何度か訪れたことがある。その当時も、この遺跡のイノシシが家畜化されていないかと疑って、イノシシの標本をいくつか作って検討したことがあった。しかし、その時には縄文時代のイノシシよりもかなり小さいというほかは、その違いがよく分からなかった。その後、筆者は北海道に移ったため、この遺跡の資料を見る機会がなかつ

た。金子・牛沢両氏による報告の際には、若い個体が多いという特徴から、イノシシを飼育していたのではという考えを金子先生から聞き、賛成したことを覚えている。

さて、下郡桑苗遺跡でブタを認めて後、この遺跡の資料を再検討したくて資料が保管されている泉南考古資料館を訪れた。そこでは、多量の資料が保管されていたが、破片が多く下顎骨の1例に歯槽膿漏を認めたただけであった。報告書の写真図版に示された資料の中に、ブタの形質を示すものが見られたが、それらの資料は見るができなかった。ただし、写真図版で見るとかぎり、ブタが含まれていると思われる。

(5) 亀井遺跡

イヌが3体まとまって出土したことで知られており、イノシシについても検討したいと思い、奈良国立文化財研究所で、松井章氏の担当された資料を見せていただいた。その中では、1例のみではあるが若い個体の下顎骨に、下顎連合部が短く左右の下顎骨の間の幅が広いというブタの特徴を認めた。松井氏もこの例については、イノシシと少し形質が異なるという印象を持っておられて、筆者の所見に賛同された。その他の資料については、破片のためよく分からなかった。

(6) 唐古遺跡

弥生時代の代表的な遺跡の一つであり、イノシシが多く出土していることでも知られていた。1989年と90年に田原本町へ何度かお伺いして、藤田三郎氏の好意により近年に発掘された資料を見せていただいた。発掘報告書は概報が出ているが、詳細な報告は未刊行のため、「イノシシ」の内容については概要を述べるに止めたい。⁽⁷⁾ これまでに見せていただいた資料は、1989年度発掘分までであり、その後の資料は詳しくは見えていない。この遺跡の「イノシシ」の出土量が多いが、その出土状態で、まとまって出土する例が何例か知られている。例えば、昭和52年の調査では下顎骨13個が棒に掛けられた状態を示して出土した。この場合は、菜畑遺跡の例と異なり、下顎連合部を棒に掛けた状態であった。その他の例から見て、若い個体の場合は下顎連合部を棒に掛け、成獣の場合には下顎枝に穴をあけて棒を通すのではないと思われる。この違いは、もう少しデータを集めた後に検討してみたいと思う。

さて、この遺跡の「イノシシ」の形質であるが、報告書公表された資料でも明瞭に分かることは、下顎連合部の長さが短いことである(写真図版4-1・2)。それと同時に、下顎連合部と下顎底部の成す角度が大きいことである(図1参照)。この特徴は、他の弥生時代の遺跡のブタでも共通して見られるものであり、後頭部が丸くなると同様に、吻部が短くなるというブタ化の特徴としてよく知られたものである。なお、この遺跡の場合も頭蓋骨が縦に半截されたものが多いが、それらの資料でも後頭部が丸みを持つものを認めることができた。また、雄の成獣の頭蓋骨で完存品が1例出土していたが、それにはブタの特徴はいまのところ見られなかった。野生のイノシシかもしれない。いずれにせよ、この遺跡の資料は大部分がブタではないか

という所見を得た。

(7) 愛知県 朝日遺跡

この遺跡も大量に「イノシシ」が出土しており、その一部は報告されている⁽⁸⁾。未報告の資料⁽⁹⁾については現在分類中であり、詳細な内容は報告書で述べる予定である。下顎骨の特徴を少し述べておくと、唐古遺跡と同様に下顎連合部の長さが短く、下顎連合部の幅も比較的狭いことである。この特徴は次に述べる神奈川県逗子市の池子遺跡のものとよく似ている。後頭部の破片は多いが、半截されているため計測が困難なものが多いが、イノシシとは異なって、後頭部の丸いものが多い。歯の萌出状態から見た年齢査定によると、若い個体が多いことも特徴である。

(8) 池子遺跡

最近発掘された資料であり、報告書作成のため現在分類中であるので、ごく簡単に紹介しておきたい⁽¹⁰⁾。この遺跡の動物遺体では、他の弥生時代の遺跡と異なってシカが多く、シカと「イノシシ」の出土量がほぼ同じ程度であることから、ブタではなくイノシシではないかと最初は思っていた。しかし、資料をよく見ると、朝日遺跡のブタと同様の特徴を持つ下顎骨が数点含まれていることが分かった。そこで、「イノシシ」の年齢構成を調べてみると、若い個体が多いことが明らかとなった。この遺跡の資料では、まだ十分に資料の検討を行っていないので確実ではないが、これらの事実から、この遺跡でもブタが多いのではないかと考えている。

(9) 曲り田遺跡

この遺跡の資料は、筆者が直接手にとって調べたわけではないので、最後に紹介することとした。4年前になるが、大阪市立博物館で動物考古学の特別展が行われた。その時、展示された資料の中に、曲り田遺跡のイノシシが展示されていた⁽¹¹⁾。1体分がほぼ揃って出土した資料である。その資料をガラス越しに見たのであるが、一見しただけで妙なイノシシだと思った。その時は下郡桑苗遺跡のブタの資料に出会う前であり、弥生時代のブタについての所見をまったく持っていなかったもので、曲り田の資料を見て、現代のブタではないかと疑ったことを覚えている。いずれ、この資料を手にとって見せていただきたいと思いつつ、現在までその機会を作れずにいる。ここでは、大阪市立博物館での所見を当時のメモによって述べることとする。まず、奇妙に思われた点は、1個体分がまとまって出土していることで、他の弥生時代の遺跡でことこのような出土例は知られていないことである。次に、歯の萌出状態からこの個体は1歳前後であり、その年齢にしては全体に大きく、特に頭蓋骨は野生のイノシシよりもはるかによく成育しており、ブタとしか考えられない。したがって、博物館で見たときは、現代のもではないかという疑いを強く持ったのであるが、報告書によれば弥生時代のもので間違いのないようであり、弥生時代にブタがいたことが明らかとなった現在では、その資料も弥生時代のブタと考えるべきかも知れない。いずれ、実際に検討させていただきたいと思っている次第である。

2. 弥生ブタの形質

前節では、これまで筆者がブタと認めた資料について紹介してきた。それらについて、とりあえず現在判明している形質の特徴をまとめてみようと思う。

(1) 頭蓋骨(下顎骨を除く)

保存状態の良い頭蓋骨が多く出土しているのは、下郡桑苗遺跡である。この遺跡のブタの頭蓋骨の特徴については、1989年度の報告書の中でも7項目を挙げて述べたことがある。その中で、7番目とした口蓋部後端がV字状になる点は、甲元眞之氏も指摘されたように、野生のイノシシ⁽¹²⁾にも見られることがあり、この特徴だけではブタと判断することはできない。一部分は報告書の再録になるが、下郡桑苗遺跡のブタの頭蓋骨の特徴をまとめると次のようになる。

- ① 上顎骨後部が前方に張り出す。
- ② 頬骨弓(頬骨と側頭骨頬骨突起で構成)が少し外に張り出す。
- ③ 後頭部が丸く高い。つまり顔が丸くなる。
- ④ 吻部の幅が広い。
- ⑤ 後頭骨のくぼみが深い(図2参照)。
- ⑥ 骨全体が肥大している。

(2) 下顎骨

曲り田遺跡を除く8遺跡の資料ですべて共通に認められた特徴は、下顎連合部の幅が広がったことである(写真図版4-1・2)。この特徴を検討する際に注意しなければならないこと

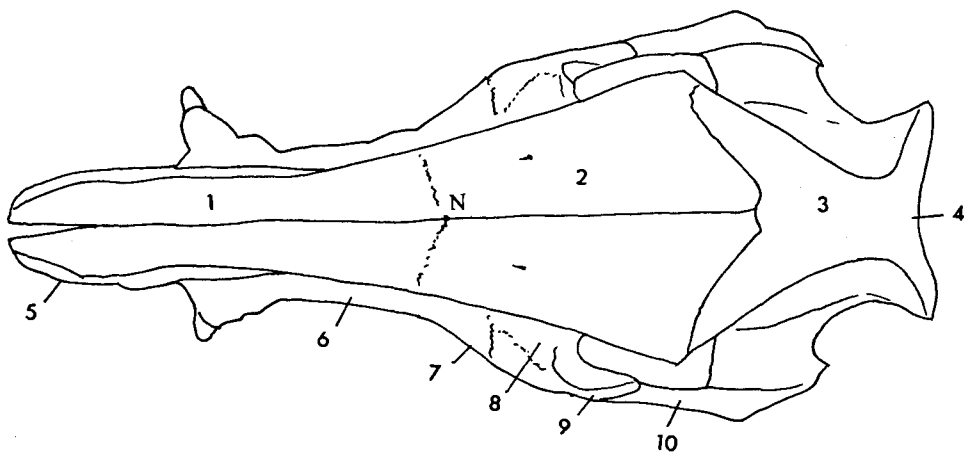


図2 イノシシの頭蓋骨の主要部位

1. 鼻骨 2. 前頭骨 3. 頭頂骨 4. 後頭骨 5. 切歯骨 6. 上顎骨 7. 上顎骨後部 8. 涙骨 9. 頬骨 10. 側頭骨頬骨突起 N. Nasion

は、すでに述べたように、同一の年齢と性のものを比べるということである。下顎連合部の場合、雄と雌の犬歯の形が異なるので、犬歯の成育に伴って雄の方が連合部の幅が広くなる。このように、常に雌雄差と年齢差を考慮しなければならない。（そのため、動物の骨をまったく見たことのない人が骨を見ても、イノシシとブタを分類できるような基準を示すことはできないのである。）

ところで、下顎連合部の幅が広くなる現象は、主に長さが短くなることが原因である。連合部が短くなると同時に、連合部と下顎底の成す角度が大きくなる傾向がみられる。（この部分の特徴については、現代のブタと比べれば一目瞭然のことであり、直良信夫氏がすでにオホーツク文化のブタを考えるとときに述べられている。）図2に示したものは、下郡桑苗遺跡の資料と現生のイノシシの下顎骨を比べたものである。発育状況の差を考慮しなければならないが、いずれも約1.5歳前後の雌の個体である。下顎底のラインを見ると、イノシシでは下顎連合部との成す角度（ α ）は小さく、また、下顎連合部の下底面のラインは直線的である。それに対してブタでは、角度が大きく、また、連合部の下底面にくぼみが見られる。この形態は、雄の成獣の資料でははっきりしないが、雌の1.5歳の資料では各遺跡に共通してみられる特徴である。

これらの連合部の特徴のすべては、下顎骨全体が短くなることに伴う変化であり、弥生ブタが日本の野生イノシシよりも吻部が短く顔が丸いという頭部全体の特徴と関連していると言える。なお、左右の下顎骨が破損せずに残っている資料は少ないのであるが、左右の下顎骨の成す角度は、弥生ブタの方がイノシシよりかなり広いことが、各地の資料で認められている。

(3) 歯

歯は、骨よりも形質的に安定しているので、イノシシと比べて大きな変化は認めにくい傾向がある。しかし、弥生ブタの中には歯が大きいものがあるということと、形態的にイノシシと異なるものがあるという点で家畜と判断している。

まず、大きさについてであるが、縄文時代晩期の愛知県伊川津貝塚の資料よりも大きなものが、菜畑と吉野ケ里で出土している。縄文時代のイノシシは、時代・地域により大きさが異なっている。計測した結果を示した上で所見を述べるべきであるが、公表できる資料が少ないので筆者の観察所見として述べざるを得ないが、新しい時代になるほど小さくなる傾向がある。これは、イノシシだけではなくシカにも見られる現象である。また、同じ時代では東北地方の方が関西のものよりも大きいと言える。つまり、縄文時代の早期のイノシシは中期のものよりも大きいし、中期のものは晩期よりも大きいし、晩期のものは現代のものよりも大きい傾向があるのである。これは、島嶼化現象と言われるもので、小さな島に移された哺乳類の場合、次第に小さくなる現象と同じと考えられる。筆者は、九州の縄文時代のイノシシをあまり見たことがないが、本州のものより少し小さいと思っている。そのような視点で弥生ブタを見ると、菜畑と吉野ケ里の資料の中には、愛知県の伊川津貝塚の資料よりもかなり大きいものがあり、

不自然である。つまり、この二つの遺跡の資料は、縄文時代のイノシシの系統を引くものではなく、新たに別のタイプのブタが大陸から入ってきたと推測されるのである。

次に、歯の形質的变化について見てみよう。菜畑の資料は写真図版3—3に示したが、第2後臼歯が丸みを持っていることが特徴である。下郡桑苗のNo. 2の資料も同様に丸い臼歯を持っていた。このような丸い臼歯は、イノシシでは見たことがなく、家畜化による変形または栄養不良と思われる。吉野ケ里遺跡の資料は、第2後臼歯の後端の形状に特徴があり、縄文時代のイノシシにはない縁が見られる(第3図版参照)。

この特徴は、現在のところ、吉野ケ里遺跡のみであり、弥生ブタに一般的に見られるものではないかも知れない。また、イノシシにも個体差があり、大きさだけではブタとは言えないが、菜畑と吉野ケ里のこの2例では形態もイノシシと異なっており、大陸から持ち込まれたブタと思われる。

(4) その他の部位

四肢骨ではイノシシと弥生ブタの違いはよく分からない。現代のブタに見られる特徴から推測して、おそらくブタ化を示すと思われる形質の特徴をいくつか認めているが、若い個体が多いので、ブタ化による形式的特徴とするには、もう少しデータを集めてから検討してみたいと思っている。その中で2例だけ挙げておくと、まず、第1頸椎にイノシシに見られない形態を示すものがある。イノシシでは第1頸椎の上面が高く盛り上がるのに対して、成育した個体であるにもかかわらず平坦でほとんど盛り上がらないものが見られる。もう1例は肩甲骨の場合で、全体の形がブタではイノシシに比べて一般的に幅が広いが、弥生時代の資料の中にも少し広いものが見られる。しかし、これらの特徴は、資料の中の一部に認められるものであり、この形質だけでブタとイノシシと区別できないかもしれない。

(5) ブタの品種について

以上、これまで分かっているブタの形質について述べてきた。それをまとめると、現在のところ、弥生ブタには少なくとも三つのタイプ(品種?)が見られる。第1は大型のブタで、菜畑と吉野ケ里遺跡のものである。第2は中型のブタで、当時のイノシシとほぼ同じ大きさである。下郡桑苗・池上・唐古遺跡のものである。第3も中型のブタであるが、下顎連合部が小さいことが特徴である。朝日遺跡のブタであり、池子遺跡もこのタイプと思われる。このような三つのタイプが、各遺跡で1タイプのみであるのか、いくつかのタイプがあり、それらがどのくらいの割合で含まれているのかについては、今後資料が公表される機会に、数量によって示していくことが出来ればと考えている。

なお、弥生時代のブタの資料を検討していて気がついたことは、同一の性と年齢であるにもかかわらず、大きさがかなり異なる個体があることである。同一の品種であっても成育状況に差があるのか、または、品種が異なっているのかもしれない。骨格に大小様々なバラエティー

があるという事実が、ブタが飼われていたことを示すのではと思っているのであるが、それを証明することはすぐにはできない。なぜならば、現生であれ遺跡出土のイノシシであれ、一つの地域の野生のイノシシの体格にどのくらいの個体差があるのか分からないからである。縄文時代のイノシシについても、一遺跡出土のイノシシの大きさのパラエティールについて、これまであまり注意してこなかったことを、筆者自身反省しているところである。

3. 弥生ブタの形質以外の特徴

弥生時代の動物遺体には、縄文時代の動物遺体と異なった特徴がいくつか見られる。その多くはブタに関連したものである。そこで、ここではブタまたは「イノシシ」に関連する特徴を、弥生時代のブタを考える際の参考として指摘しておきたい。まず第1に、弥生時代の遺跡ではシカに比べて「イノシシ」が多いことである。縄文時代のシカとイノシシの比率がほぼ1対1であるのに対して、弥生時代は2対8程度になることもある。このような「イノシシ」の多さについては、弥生時代になってイノシシ狩猟が縄文時代に比べて活発になったとも言われたが、そのように考えることは不自然である。筆者が実際に遺物を見せていただいた遺跡では、頭蓋骨と下顎骨で見えるかぎり、イノシシはごく少量であり、「イノシシ」とされていたものの大部分はブタと思われた。第2に、ブタの年齢構成を見ると、若い個体が多いことである。これは、一般に家畜の年齢構成の特徴として知られているものであり、池上遺跡のイノシシの検討の際に金子・牛沢両氏によって用いられた方法である⁽⁵⁾。第3に、歯の萌出状態から見ると、縄文時代とは少し異なった季節に死亡している個体が多いことである。このことは、ブタを殺す季節が縄文時代と異なっていたことを示しており、弥生時代のブタを考える上で重要な点である。筆者は、ブタは食用とされたことは当然としても、農耕儀礼の際にも用いられたと考えており、ブタの死亡時期は農耕儀礼の季節を示す可能性があると考えている。具体的事例でのブタの死亡時期の査定は、近日中に刊行されるいくつかの遺跡の報告書で明らかにする予定である。第4の点は、ブタの解体の仕方である。弥生時代のブタの場合、下顎骨の外側の2カ所に解体痕を持つものが多い。1カ所は、下顎枝の上部であり、咬筋を切断する時の傷であろう。もう1カ所は、第1・第2後臼歯の部分の顎骨に認められるもので、なぜそこにキズがつくのかよく分からないが、頭部の皮をはぐ時かとも考えている。解体痕は縄文時代のシカやイノシシにも見られるが、下顎骨にこのように規則的に、しかも多くの資料で見られることはなく、弥生時代のブタの解体方法が決まっていたように思われる。解体については、頭蓋骨の処理の仕方も注目される。縄文時代の場合、脳髓を食べるために、縄文人は大後頭孔の周りを壊すことが多い。それに対して弥生人は、大後頭孔の周りを壊すこともあるが、それよりも頭部の上面の縫合に楔をあてて、頭部を左右に二つに割ることが多い。ナタのようなもので左右に割ることも

行っている。このような割り方は、縄文時代には全く見られなかった方法である。第5の特徴として、四肢骨では、割られていない骨が多く、場合によっては尺骨と橈骨が接合した状態で出土することである。縄文人は、骨髓を食べるために、四肢骨の大部分を壊しているが、弥生人は骨髓を食べたとしても、縄文人ほど徹底して食べようとはしていないと思われる。この点については、報告書等の中で数量を示して明らかにしたいと考えている。

4. ブタの用途

さて、ここでブタの用途について少し考えてみたい。この点については、すでに何度か話したことがあり、また、広報紙などで述べたこともある。その要旨を簡単にまとめると次のようになる。まず第1に、ブタは食用であったことである。これは、解体されていることから明らかである。第2は、ブタは儀礼に用いられたことである。何度も述べているように、弥生時代のブタや「イノシシ」の下顎骨に穴がけられたものが多いが、その穴は食用にするためにあけたのではなく、棒を通して掛けるためである。下顎骨に穴をあけない場合は、連合部を棒に掛けた。それらの行為は、おそらく儀礼に伴うものであり、その儀礼は農耕儀礼と思われる。農耕を順調に行うには、天候の順調を願う儀礼が伴っていたはずである。そのように考えれば、日本に稲作技術のみが伝わったと考えることは不自然であり、農耕儀礼を含む農耕文化全体が日本に伝わったと考えるべきであろう。つまり、ブタは単に食用としてだけではなく、農耕儀礼に必要なものであり、そのために、日本に持ち込まれたと思われるのである。

5. ブタからみた弥生人

以上、弥生時代のブタについてこれまでに観察した所見をもとに、縄文時代と比較しながら述べてきた。その中でも述べたように、弥生人のブタの扱い方は、縄文人のイノシシの扱い方とかなり異なっている。筆者から見れば、弥生人が縄文人とは異なった価値観をもってブタに接しているように思われる。すなわち、弥生人のブタの取り扱い方から考えて、縄文人がそれまで狩猟の対象としていた野生のイノシシを捕まえて、弥生人がそれを家畜化したとは考えられないのである。ブタの形質も、これまで述べてきたように、縄文時代のイノシシとはかなり異なっており、縄文時代のイノシシを家畜化したものとは考えられない。この点については、異論を持っておられる方もあるであろうし、ここでは筆者の考えを数値によって証明することは出来ないが、いずれ改めて議論する予定である。しかし、これまでの資料から見るかぎり、少なくともブタを日本に持ち込んだ当初の弥生人は大陸からの渡来人であったと思われる。そして、ブタの出土量から見て、渡来人はかなり多かったのではなかろうかと推測される。また、

渡来は一回ではなく何回もあり、そのグループごとに、別のブタを連れて来た可能性が考えられる。そのグループは、男だけのグループの場合もあったかもしれないが、おそらく、氏族単位でまとまって渡来したことも多いのであろう。その場合、農耕技術だけではなく、故地における身分制や家族制をはじめとして、すべての生活様式が日本に持ち込まれたと考えてよいであろう。それらの弥生人が日本各地に広がるにしたがって、ブタも各地に広がったと思われる。もちろん、弥生人が縄文人をすべて駆逐したと考えているわけではなく、弥生時代の当初の段階においては、渡来人が多いというだけである。つまり、九州の縄文人が朝鮮半島や中国大陆に出かけて行って稲作を学んで日本に帰り、稲作が広まって弥生時代になったと考えることは無理があり、多くの渡来人によって、弥生時代になったと考えた方が理解しやすいのである。

おわりに

弥生時代のブタについて、現在分かっていることで、公表可能な点について述べ、そこから弥生時代におけるブタの意義を考えてきた。しかしながら、未報告の資料が多いことから、ブタについて十分に述べる事が出来なかった。弥生時代のブタについての研究はまだ始まったばかりであり、機会をみつけて多くの資料を検討し、ブタの内容を明らかにしていきたいと考えている次第である。

最後に、本論を作成するにあたり、引用させていただいた各遺跡の発掘関係者の方々に深く感謝致します。

註・引用文献

- (1) 西本豊弘「弥生時代のブタ」『季刊考古学』第28号 91～92頁 1989年
- (2) 西本豊弘「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」高橋信武他『下郡桑苗遺跡』48～61頁 大分県教育委員会 1989年
- (3) 渡辺 誠「動物遺体1・哺乳類」中島直幸他『菜畑』399～419頁 唐津市教育委員会 1982年
- (4) 未公表 佐賀県教育委員会の好意により公表。
- (5) 金子浩昌・牛沢百合子「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡 第六分冊 自然遺物編』9～32頁 大阪文化財センター 1980年
- (6) 松井 章「亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺体の分析」『亀井（その2）』423～484頁 大阪文化財センター 1986年
- (7) 田原本町教育委員会・藤田三郎氏の好意により資料を見せていただいた。
なお、写真図版に引用したものは、『唐古・鍵遺跡 第13・14・15次発掘調査概報』田原本町教育委員会 1983年より複写した。
- (8) 渡辺 誠・磯谷和明「朝日遺跡の動物遺体」『朝日遺跡』257～264頁 愛知県教育委員会 1982年
宮腰 健司・佐藤 治「朝日遺跡出土の動物遺存体」『愛知県埋蔵文化財センター 年報 昭和63年度』150～157頁 1989年
- (9) 報告書（自然科学編）は1992年3月に刊行予定である。
- (10) 神奈川県埋蔵文化財センターの好意により、公表させていただいた。

- (11) 大阪市立博物館で昭和62年に行われた特別展『動物の考古学』で観察した。
船越公威「曲り田遺跡出土の脊椎動物遺存体」『石崎曲り田遺跡Ⅱ』415～421頁 福岡県教育委員会
1984年
なお、この資料については、特別展の図録では縄文時代晩期とされているが、藤尾慎一郎氏の教示により弥生時代のものとした。
- (12) 甲元眞之「日本における初期弥生文化の成立」の追記 『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ』553～
613頁 横山浩一先生退官記念事業会 1991年
- (13) 西本豊弘「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」古代 第91号 114～132頁 1991年
- (14) 西本豊弘「ブタと日本人」『歴博』34号 12～13頁 1989年
西本豊弘「弥生時代の家畜」歴史群像特別編集『日本文化起源論(弥生のルーツを大陸に探る)』88
～91頁 1990年

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

Pigs in the Yayoi Period

NISHIMOTO Toyohiro

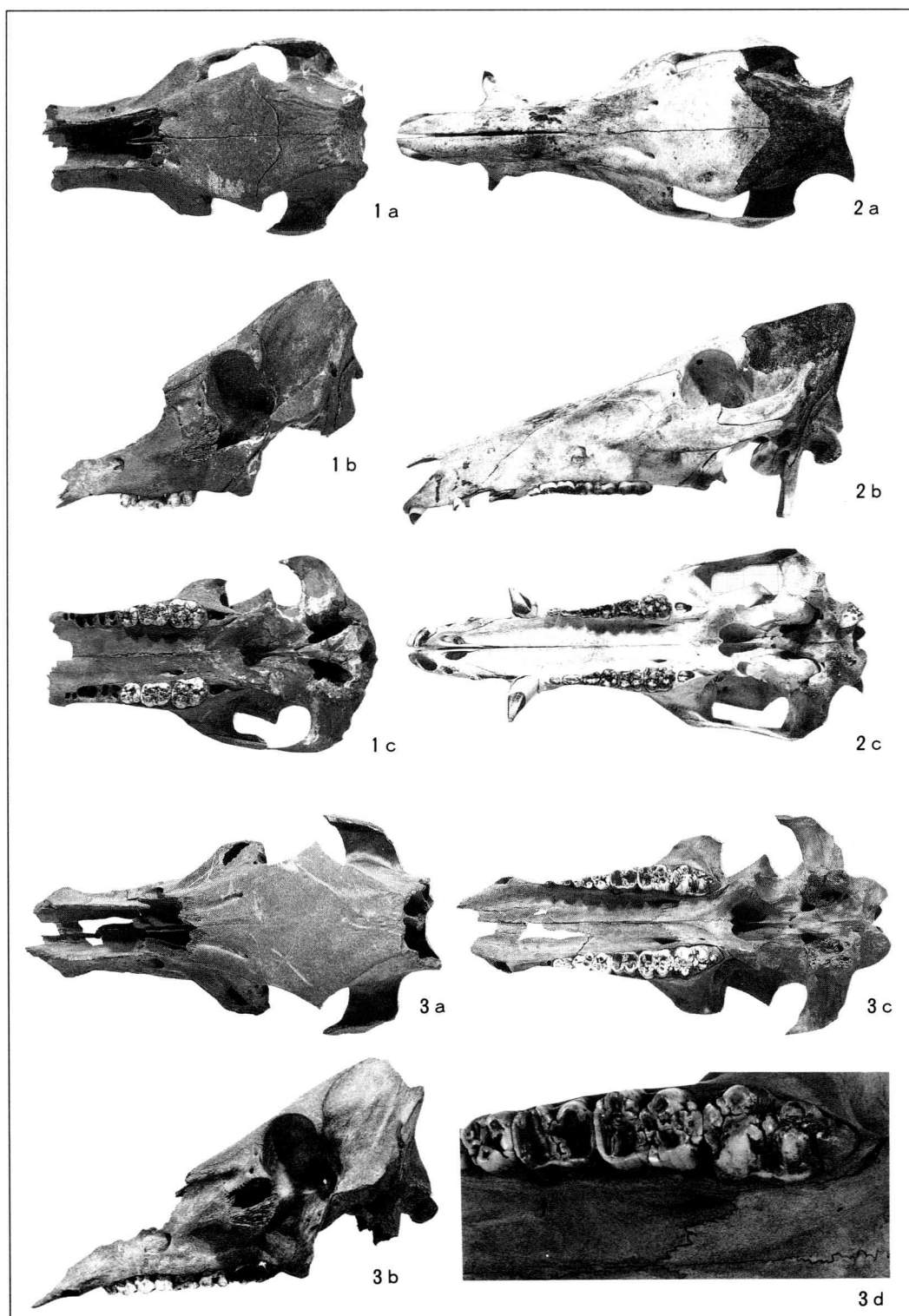
This paper examines the question of whether the "boars" excavated from the sites of the Yayoi period are domesticated pigs. My results show that, in all the 8 sites ranging from the Kyushu to the Kanto Districts from which many "boars" have been excavated, a considerable number of pigs are included. These pigs are characterized by a rounder occiput and wider buccal part than boars. Three or more types, ranging from larger to smaller sizes can be distinguished, so it seems there have been several types of pig. Judging from their physical characteristics, I think that the pigs of the Yayoi period were brought from the Chinese continent by foreigners, rather than being domesticated Japanese boars. In most cases, the cranial bones of the pigs were split lengthwise from the vertex, and this method of slaughtering has not been found from remains of the Jomon period. Furthermore, a large number of lower jawbones with a drilled hole have been excavated. Some examples show that a jawbone was treated ritually, by passing a bar through this hole. No examples are known of the lower jawbones of boars with drilled holes from the Jomon period, so the above treatment with a bar is characteristic of the Yayoi period. Judging from this fact, it seems that the pigs of the Yayoi period were used not only as food, but also for agricultural rites. Also, from the large number of pigs excavated from each site, it is supposed that a large number of foreigners came to Japan in the Yayoi period. In other words, the Yayoi period started not only with the transmission of rice culture and the tools for it, but with the whole life system of an agricultural culture with pigs brought to Japan by foreigners.



写真図版1 ブタとイノシシの頭蓋骨側面

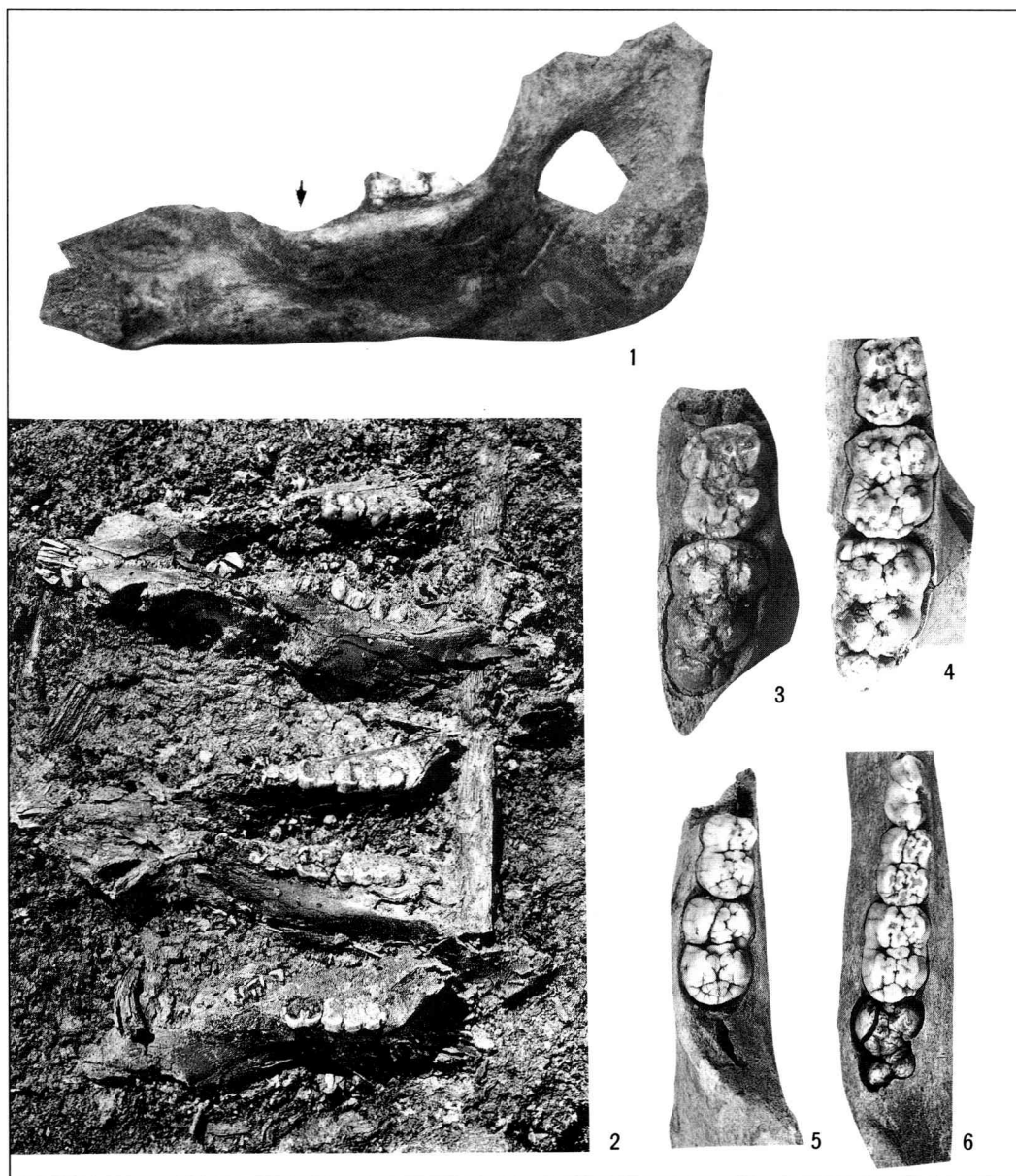
- 1、下郡桑苗遺跡出土のブタ（雄・成獣）
- 2、現生のイノシシ（雄・成獣）

矢印は眼窩上部を示す。イノシシではこの部分が少しふくらむが、ブタでは少しくぼんでいる。ブタでは、この矢印より後方の後頭部が高くなるのが特徴。



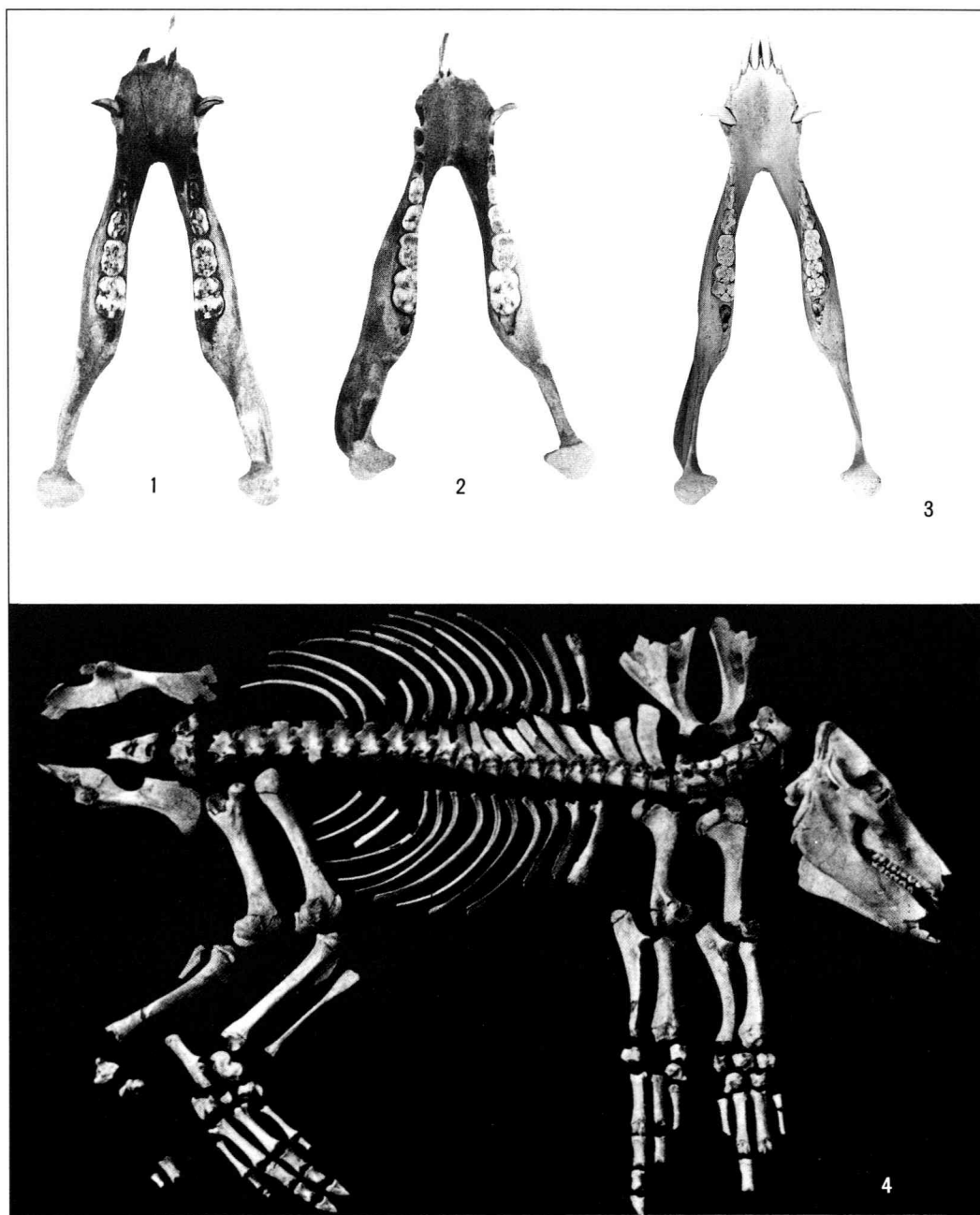
写真図版2 下郡桑苗遺跡のブタと現生イノシシ

1・3, 下郡桑苗遺跡出土のブタ〔1, 雄の若獣(No.2) 3, 雌の成獣(No.1)〕2, ブタと比較するために示した現生イノシシの雄・若獣 3dは、歯槽膿漏の部分を拡大(矢印)



写真図版3 菜畑遺跡と吉野ヶ里遺跡のブタと伊川津遺跡のイノシシ

1・2・3、菜畑遺跡 4・6、伊川津遺跡 5、吉野ヶ里遺跡 [1、下顎枝に穴をもつ例、矢印は歯槽膿漏の部分。2は3個の下顎骨の穴に棒を通した状態を示す例。取り上げに失敗したため、ブタかどうか確認できない。3、丸みを帯びた第2後臼歯をもつ上顎骨 5、丸く大きな第2後臼歯をもつ下顎骨 4・6はブタと比較するために示したもの。]



写真図版 4 唐古遺跡と曲り田遺跡のブタと現生イノシシ

1・2、唐古遺跡のブタの下顎骨(約1.5歳 性別不明) 3、現生のイノシシ(約1.5歳 雄, 1・2はほぼ同大に縮小した) 4、曲り田遺跡のブタ?の資料